

「ad plus～広告の視点～」では、日本経済新聞に掲載された注目の広告を、その狙いや目的、反響などと紹介しています。

疾病啓発広告事例

新コンセプト宣言に込めた思い

ヤンセンファーマ

janssen
Pharmaceutical K.K.

働くひとの1/3は病気とつきあいながら、という事実がある*。
IBD（潰瘍性大腸炎・クローン病）患者さんの就労も、
もっと当然にしていかなければ。

この国に、 「ワークシックバランス」 という考え方を。

「健康第一」「元気がいちばん」。世の中のほとんどの人が感じているはず。そして、その考えに間違いはないでしょう。ただ、ほんの少しだけいいから「それがすべてか」と問い直してみしてほしいと私たちヤンセンファーマは思います。

なぜなら、いま現在も、就労する全てのひとの1/3は何らかの疾病をもちながら働いているからです*。「いっさい不安なく健康」な人は、それほど存在しない。だからこそ、じぶんの症状とじょうずに向きあい、周りのひとといっしょに「病気」と「働く」をいまよりも仲のいい関係にしていけないか。それが、私たちが提唱する「ワークシックバランス」という考え方です。

例えば、ここでとりあげるIBD（潰瘍性大腸炎・クローン病）について言えば、「お腹が痛くなりやすい」「トイレの回数が多い」など、患者さんだからその特徴があることは確かです。ただ、それは本人の仕事の能力とは全く関係がないこと。周囲からの理解を得られれば、職場のちからとして自分らしく活躍できる。症状をコントロールでき生活が充実すれば、能率や生産性もよりアップするという好循環も生まれる。IBDとつきあいながら、さまざまな分野で結果をのこすプロフェッショナルがいることも、それを証明しています。

「ワークシックバランス」。ヤンセンファーマ「IBDとはたらくプロジェクト」は、この考え方を世の中に広めるための情報発信を続けていきます。患者さん向けのセミナーを積極的に開催するなど、「病気をマイナストらえない社会づくり」へと一歩を踏み出していきます。

*厚生労働省「平成25年度国民生活基礎調査」

ヤンセンファーマ IBDとはたらくプロジェクト

協力：NPO法人 IBDネットワーク／株式会社ゼネラルパートナーズ

IBDとは？

免疫異常により腸に炎症を起こす病気で、主に潰瘍性大腸炎とクローン病の2種類があります。長期的に病状が悪い時期（再燃期）と落ち着いている時期（寛解期）を繰り返す特徴がある慢性疾患です。

IBDとはたらくプロジェクト
WEBサイトはこちら

©Janssen Pharmaceutical K.K. 2020 2020年11月作成

2020年11月25日
日本経済新聞 朝刊
全15段・カラー



コミュニケーション & パブリックアフェアーズ部 セラピューティックエリア コミュニケーションリード 岸和田 直美 氏

IBD（潰瘍性大腸炎・クローン病）は、下痢や血便などを繰り返す難病だ。患者は病と共に就労しているため、周囲の理解を必要としている。ヤンセンファーマはIBDの認知向上と、仕事と病の両立への理解促進を目的に、新コンセプト「ワークシックバランス」を宣言した。

「この言葉の持つインパクト、わかりやすさが選定の決め手」と岸和田氏は話す。読者に我が事として捉えてもらうのが狙いだ。インパクトがある分、ネガティブな反応が起きないよう文言選びは慎重かつ丁寧に進めたという。宣言としての意味合いから、メインビジュアルは風になびく旗を掲げている。色合いは鮮やかな青。同社のコーポレートカラーとこのプロジェクトカラーの親和性から選んだ。

反響は想定以上。「意義のある活動（医師）共感できる」「一般読者など多数の声が寄せられ、「思いが届いたことが実感でき大変うれし」（岸和田氏）。

今回の広告は初の一步。これを機に今後も病気をマイナストらえない社会づくりのため、さまざまな活動を通じてこのコンセプトを訴え続ける考えだ。